

美の巡礼

伏木田 光 夫



1969年6月、横浜よりソビエトまわりにてヨーロッパへ出発。寝袋、鍋、その他リュック一つ、20数kg。

モスクワで特筆すべきことは、マチスの大伯展をブーキン美術館でみる、一年後、巴里のプチパレーの大伯展を合わせると、マチスの主要作品を、かなりみることとなった。幸せ。

レーニングラードよりフィンランド入り、シベリウスを生んだ国にしては三流画家しか育だっていなかった。菅井汲の大作あり。北欧の輝やく北極星はただ一人エドワード・ムンクのみ、北欧入りの理由でもあった。途中スウェーデンの美女共にみとれ、オスローによくやくたどりつく。新しくできたムンク、美術館が晩年のおびただしい未完の作をみる。おそるべき作品であった。

ムンクについては、ヨーロッパの主要作品はすべてたづね、イギリスまで行くことになった。デンマークを通過してドイツ入り、乞食の如き旅で行きあたりばったり、夜になると寝袋に寝る。ユース・ハウス、ありがたき宿であった、1泊400円ほど。ハンブルグにて飾り窓の女、毎日みにいく。オランダ、ベルギー入り、フランドル絵画巡礼のため、行ったり来たり。グレンラー・ミユラー美術館のゴッホをたづね、オスランドより雨中三里歩く巡礼は死にもの狂いなるもの。

ブリュージュをみだし、はるかなるウィーンに向う。ドイツ、ルクセンブルグなど、ぶらぶらしてウィーンは遠し。ウィーン、でブリュージュ、ごっそりあり。毎日音楽をききいい調子。住み心地最高。住みつこうと思っているとき、ザルツブルグ音楽祭始まり、矢も楯もたま

らず、モーツアルトの生地に。宿なし。野原で寝起、夜になるとバリットして出かける。セザール・フランクをきき感激の涙。

近代絵画の宝庫といわれるスイス美術館の巡礼に向う。ジャコメッテの大遺作展をみる。よせば良いのにアルプスへ行く。山頂にて日本女子大生の修学旅行の一人に会う、さながら富士山頂の如し、親切これ努める。

イタリア入り、南のボンペーまで、だらだらの乞食旅行。フィレンツェには半月ほど。ローマ現代美術館の坂下の動物園、日参。ローマのトラ、ことのほか気に入った。聖ポロロ寺でパッハをきいて、オイオイ泣いた。その前日、バチカンにたどりついて、一生キリスト教信者にならないことを誓った後にしては、おそまつ。

ナポリでは、イタ公とケンカ口ばかりの野郎である。デンマークのねずみのような男より、テンボは良かった。イタリアの真夏にコットンの胴巻きを金入れはつらきこと。湿疹が出き、チントレットをみながらポリポリは美神に見苦しき様と、8月下旬、巴里について、美しき女、たんとありと確認後、この都やはり、なんとはなしに調子良しと、足をとどめる。ボヘミアン変じ芸術家となる。

やがて気がついたときは、年半も過ぎていた。はたして女房は日本にいるか、心配になり、また紅白歌合戦の伊藤ユカリちゃんを一目と、1970年もあと4日という日帰国。オルリーで飛行機にのりおくれ。パリーに逆もどりしてたらふく食った。ムール貝は、日本の正月まで腹下りで苦しめた。おろかなる美の巡礼よ、さらば。